

# 近代的個人観の変遷と新しい社会構想

中央大学経済学部 教授 瀧澤 弘和 氏

## Part1：講義

【中谷理事長】 今日、中央大学の瀧澤先生に、お忙しいところ来ていただきました。

瀧澤さんと私はもう十何年のつき合いがありまして、そして今、私が土曜日にやっております不識塾の師範としていろいろ貢献していただいております。今日の話は、現実の資本主義世界がどうなっているかということよりも、どちらかというとなり哲学的な話になるだろうと想像しています。1時間とにかく自由に話していただいて、その後、何でもばんばん質問するという形でいきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。一応私の方からご紹介だけ。

### はじめに：本日の講義の見取り図

どうもありがとうございます。ご紹介にあずかりました中央大学の瀧澤と申します。

こういう場で皆さんと議論できるということを実際に楽しみにしておりました。

今ご紹介いただいたように、どうも私の話というのは結構観念的に聞こえて、何か小難しいことを言っているというふうに思われてしまいがちなので、まず最初に、今日の話がどういう話になるのかということを見取り図としてお話しして、そのうえで必要な部分をかいつまんで説明していき、ひとつのストーリーになればいいかなと考えております。

おそらく皆さん今までにも勉強したかと思うのですが、「われわれは近代という時代にいる」ということは自覚されていると思うのです。では、その近代というものがどうやって始まったかという、これも通説ですけども、デカルトの哲学というのがありました。ちなみに、実はホッブスの方がデカルトよりも先に生まれていたのです。哲学的には、通常言われるのはデカルトの哲学



があり、それで個人というものが哲学の焦点になって、社会に対する見方も、ホッブスやロックなんかは述べていく、というわけです。そして、その個人というものを前提にしながら社会観をつくってきたわけですね。そして、民主主義とかいろいろな近代的な概念がその上に乗ってきて、これまで数百年にわたって近代的な物の見方とか社会制度をつくってきたと言えると思うのです。

きょう私がお話しすることは、ある意味ではわれわれはデカルトとかホッブスとかロックと同じような状況にいるのかもしれない、ということです。つまり、デカルトとかホッブスとかロックが、社会の構造とか個人をどうとらえるのかということについて、知的格闘をやったのと同じような状況にいるのかもしれないということが本日一番言いたいこととなります。それを説明するためには、デカルトとかロックが考えていた時代状況と、現在の時代状況が変わってきたということをお話しする必要があります。すなわち、20世紀の哲学とか科学の進展によって、われわれが個人とか社会を見る目というものが、どういうふうに変ってきたのかということで話を補いたいと思っているわけです。

それは非常に単純に言ってしまうと、進化の産物として人間の心を見るということになるかと思っております。そうすると、そういう人間像をもとにして、近代的な

社会とはちょっと違う社会を構想するという試みが徐々に提示されつつあるということです。その試みは複数あって、さらに考え方も違うので、今の時点でそれぞれの考え方というのはどう評価できるのか、そしてわれわれはそのうちどれを選んでいくのかということを考えなければいけないのではないかと問題意識で、きょうのお話を組み立てていくこととなります。

## 近代的世界観の勃興

1 番目の、近代的世界観の勃興というところについては、大ざっぱにしかお話ししませんけれども、先ほどお話ししたように、このときにはガリレオ・ガリレイとかニュートンの物理学での大成功ということがあって、それによって、それ以前のわれわれ人間が世界を見る見方というものを壊していったわけです。すべてを目的論的に見ていくという見方があったのを、全部壊してしまったわけです。

さらに、デカルトが出てきて、本当にすべてを疑うという「方法論的懐疑」ということを行い、「もしかしたら神様さえ自分をだましているのではないか」みたいに、疑って疑って疑い抜いたのです。それで、自己やコギト（これは「私は考える」というラテン語ですけれども）を発見したわけです。ローティによれば、そのように物的な世界から完全に隔離された自己、そこに「心」という概念を発見して、内的な空間を確保したことが「デカルトのコギトの意義」ということとなります。そして、デカルトとその周辺の哲学者たちは、人間が世界を認識するのはどうやってするのかというと、世界を心の中に「表象」として写すという概念を打ち立てたのです。

そういうふうにするので、それ以前の世界とどういうふう違ったかということ、主観と客観が完全に分離してしまうわけです。主観と客観は、われわれも日常的に使う言葉ですけれども、そういう言葉自体が、そこで生まれてきたのです。また、哲学の中心問題というもの、人間がどうやって世界の真実を知り得るのかという認識論が中心になってくるということになります。

人間に対する見方も、認識主体としての人間という観点が中心になってきます。それで知識がふえていけば、自然を人間が変更することができるという考え方に至ります。おそらくそれ以前であれば、根本的に人間というものは世界の中にあるとか、人間そのものの内に世界があるとかが、そういう見方だったと思うのです。けれども、人間と世界との見方も変わってきたのです。

次に、「個人と社会」についてです。

「人間は、自分自身を自分でもって定義するような主体である」という観点から、自律的な個人という考え方が生まれてきます。そして、それがアトムとなって、そのアトムである個人が集まって社会を形成しているように見ようになってきました。注意しておきたいのは、ベクトルが、個人から社会へと向いていることです。社会があって個人があるというふうに見るのではなくて、さっきのデカルトのコギトみたいに、完全に遮断した人間というのがあるわけです。そこに「個」というのがあって、そこにつくられた主体が社会を形成していくということです。

それを非常にカリカチュアライズした言い方が、「人々を、あたかもたった今地上に湧き出し、互いにいかなる約束をすることなく、突然(キノコのように)完全に成熟するかのように考える」というホブズの記述になるわけです。

こういう近代的な世界観というものは、今日までかなり続いていると思います。そういう根本的な見方はいろいろな社会制度に反映されていると考えていいわけです。個人の責任とか、もちろん個人の自由という概念もそこにあるでしょう。そして、個人に自由があるのだったら、そこに責任を帰属させるという概念が出てきます。ということで、近代法の体系もその上に成り立っていくということだと思います。そして今もわれわれは、このパラダイムの中に生きているということは間違いないところだろうと思います。

それに対する反発はいっぱいありました。ここではそれは省略させていただきますけれども、われわれは基本的なところでは、近代の枠組みの中で現在も生きている

ということだろうと思います。

## 20世紀とヴィトゲンシュタイン

ここが中心だと思しますので長く話したいと思いますが、20世紀という時代、これはどういう時代だったのかということに移りたいと思います。そしてこの時代をヒントにして、近代の枠組みというものが、どういうふうに変らぐのかわからないけれども、もしかしたら根本のところが変わってきつつあるかもしれない、ということをお話していきたいと思います。

20世紀という時期は、おそらく人類の歴史の中でも異常な世紀だったのではないかと思います。たとえば、20世紀に書かれた科学論文の数と、それ以前に書かれた数と比べるとどうなっているのかと考えると、20世紀とはすごい時代だったのではないかと思うわけです。

それを特徴づけるために、私は20世紀を「前半」と「後半」とに大胆に切り分けました。前半は論理学とか物理学が甚大な影響を及ぼした時代で、後半は進化論が甚大な影響を及ぼした時代、というふうに考えると、この時代が分かるのではないかというような気がします。

ダーウィンの『種の起源』が発行されたのは1859年でした。マルクスの『資本論』が刊行されたのが、1867年から1894年にかけてですので、ほぼ同時代だったわけです。20世紀の後半になってようやく、初めて進化論がどのような社会的な意味を持つのかということが明らかになってきたと言えると思います。

それから、統計学も20世紀の学問です。おそらく皆さんも業務で統計的検定を使ったことはあると思いますが、これも甚大な影響をわれわれに及ぼしているはずで、もっとも、その意味について語れるほど僕は知らないで、きょうは外させていただきます。

こういうふうに20世紀を前半と後半に分けたときに、実はヴィトゲンシュタインという哲学者がこの区分をうまく反映している人だと思います。ヴィトゲンシュタインの著作を読んでも、だいたい、前期ヴィトゲンシュタインと、後期ヴィトゲンシュタインに分けることがで

きます。中には「中期」を立てる人もいるのですけれども。

前期にヴィトゲンシュタインは、『論理哲学論考』という本を書きました。この本は、それ以前の哲学からの大ブレイクとなりました。どうして大ブレイクなのかというと、こういうことです。『論理哲学論考』においては、「私」が「世界」を認識するという関係で考えると、「私」という存在は消えるのです。どうして消えるかというと、言語をもって「世界」をとらえる「私」という構造に変わるわけです。だから、言語で把握されていないものは「世界」ではないという、そういう考え方なのです。

そして、その言語に関しては、19世紀末から20世紀に初めにかけてフレーゲという人が登場しました。フレーゲは、本当にすごい人だなと思いますけれども、「アリストテレス以来進歩もなければ後退もない。いわば完成された学問」というふうにカントが言っている論理学を、独力で全部革新するわけです。これが、われわれが知っている今日の論理学です。命題論理とか述語論理という記号論理学の世界になるわけです。これはあまりにも強力なツールだったので、言語を通じて世界を論理的に把握していくことを、ヴィトゲンシュタインは、『論理哲学論考』で考えたわけです。

そして、それがオーストリアに飛び火して、そこで「ウィーン学派」と言われる、論理実証主義を生んでいったのです。ヴィトゲンシュタインの影響が、20世紀前半にもものすごく大きかったことが理解できます。

後期になりますと、ヴィトゲンシュタインは自分が前期に書いた『論理哲学論考』は完全に誤りだったと明確に書いています。そして日常的な言語使用の分析に入り込んでいくのです。それと同時に、むしろプラグマティズムにどんどん傾斜していきました。

こういうふうに考えてみると、後期のヴィトゲンシュタインは、プラグマティズムとか日常言語に推移していくわけでありますけれども、20世紀の初めにヴィトゲンシュタインが言語を通じて世界を論理的に把握していくという考え方を打ち出したことによって、哲学は大きく舵をきったというふうには言っているわけですね。すなわち、

二元論のような近代的な世界観に対して反対する哲学はそれまでもいっぱい生まれてきたのですが、ヴィトゲンシュタインは直接二元論に対抗するというよりは、言語を使用して世界を把握しようという方向に舵を切ったのですね。

それが、言語論的転回 (linguistic turn) と呼ばれるものになります。この概念でもって、前期のヴィトゲンシュタインは、世界に起こっている事態と言語で表現している事態がちゃんと対応しているならば、それによってわれわれは真理に関していろいろな命題を組み立てていくことができると考えたわけです。

それを「真理の対応説」と言うのです。この考え方でいうと、世界に起こっていることと、ある文章とを見比べて、それは対応づけられると考えているわけです。それが前期のヴィトゲンシュタインの世界です。

ところが、後期のヴィトゲンシュタインになると、言語の使用に関して、ひとつひとつの文と世界のひとつの事態との対応関係では絶対に理解できないというふうになってくるわけです。われわれが実際に言語を使用しているということ、その活動を分析してみると、当然それらはその中でルールに従っているわけです。これを「言語ゲーム」と後期のヴィトゲンシュタインは名づけるわけです。われわれはルールに従っています。それから、言語で使われている概念同士は実はネットワークをなしています。たとえば、「これは赤い」と言う時に、「赤い」という本当に根本的な概念ですら、さまざまなほかの概念を前提にしないと意味をなさないわけです。そういうような形で概念というものがあらわれてくるわけです。

そして、ヴィトゲンシュタインにとって「私」という主体は、この『論理哲学論考』の体系の中では、唯一話題にすることができないものだというふうには考えられているのです。「私」という言語の限界は、「私の世界」の限界を意味しているのです。思考し表象する主体なるものは存在しないのです。このように、ヴィトゲンシュタインは言語を前面にバーッと押し出して哲学をし始めたということがよく分かると思います。

だけど、「私」と「世界」というふうには考えていた哲学から、「言語」と「世界」という関係に移って、さらに「言語」を使う人間がいるわけですから、「私」あるいは「人間」、そして「言語」という媒体があって「世界」がある、というふうに変ってくるわけです。言語を使う者としての私は、必然的に社会性を帯びているというふうに見るわけです。

最近の認知科学も基本的にこういうラインに沿っていると行っていいんですけども、この「私」というものについて、無意識の部分の占める割合が異様に高くなってきたのです。ですから、無意識的あるいは意識的な「私」と「人間」、そして「言語」があって、「世界」がある、という構図に変わってきたのではないかと思います。

## 20世紀における哲学の転換

ここで、哲学が20世紀の前半から転換してきたことの具体例を説明しておいた方がいいかなと思います。前期のヴィトゲンシュタイン、あるいは論理実証主義の考え方を批判することから、いくつかのコアとなる考え方が出てくるのです。

ひとつが、ホーリズム、全体論ということです。これについては、クワインという人が書いた「経験主義の2つのドグマ」という論文が決定的に有名です。その第2のドグマというものは、さっきも言ったように経験的な言明というのは、ひとつひとつ世界の感覚的な経験と対応して検証できるという考え方なわけです。そして、それはあり得ない、ということをクワインは言いました。

彼の「描像」を分かりやすく言うと、クロスワード・パズルのようなものということです。クロスワード・パズルで何か解こうとするときに、ヒントがありますよね。ヒントは、何か感覚的な経験だというふうには思って下さい。ヒントがあれば、クロスワード・パズルに入る言葉がひとつに決まるかということ、そうではないわけです。クロスワード・パズルに入る言葉は、ほかのところに入っている言葉とお互いにかみ合っているわけです。そういう感覚です。ですから、クロスワード・パズルの解がヒ

ントと1対1になっていないように経験的言明と感覚的  
経済は1対1になっていないということです。

そしてクワインは、「外界」についてのわれわれの言明  
は、個々独立にではなく、ひとつの団体として、感覚的経  
験の裁きに直面する、ということを言っていますが、こ  
のことは、今の哲学者はほとんどが受け入れていること  
だと思えます。

そして次に、アメリカの哲学者セラーズの話をします。  
セラーズの「概念の全体論」とは、「より基本的な概念(た  
とえば、赤の概念)をもつことでさえ、他の多くの概念を  
もつことを前提としている」ということです。

それから、われわれが言語を交換するゲームについて、  
セラーズは「理由の空間」と言うのです。詳細は省くとし  
て、今の哲学者がどういうふうを考えているかという  
と、こういうふうを考えているのです。たとえば、ローティ  
は「知識は社会的実践—自分の主張を自分の同胞に対し  
て正当化するという実践—から切り離すことができない  
のである。知識はこの実践によって前提とされているわ  
けではない。知識は、社会的実践とともに出現するのだ  
と書いています。そういうふうに見方がだいぶ変わ  
ってきているのが分かると思います。

2つ目は「外在主義」です。さっきも言ったようにデ  
カルト以来、哲学の中心は認識論だったのです。そし  
て、「われわれが真なる知識を持つということはどうし  
て可能なのか」という命題に集中してきたのですけれど  
も、実は知識というものは、プラトン以来20世紀の半ば  
まで、「正当化された真なる信念」だという定義でした。  
justified true beliefというのですけど、これを「JTB」  
というふうに表記すれば覚えやすいですね。しかし、そ  
れが決定的に論理的に論破されるのです。1963年に、  
それに当てはまらない矛盾した状況をゲティアという哲  
学者が出してきたのです。

それでは、なんでわれわれが知識について間違ってきたのか  
ということ深く追究していくと、知識というものはわれわれ  
人間が頭の中に持っていて、自分ひとりの中で正当化して  
いるという「描像」に行き着くのです。こ

のことを「内在主義」と言い、正当化に関する内在主義と、  
知識に関する内在主義があります。正当化に関する内在  
主義について見ますと、認識主体が何かを信じるための  
正当化を持つかどうかを決定する要因が、その認識主体  
が反省のみによってアクセスすることができるもの、つ  
まり内的にアクセスできるものによって正当化できる  
という考え方です。

簡単に言うと、これが論駁されていくのです。さっき  
もローティの言葉にありましたが、知識とは社会的な実  
践なのです。たとえば、私が何か知識を持っているとし  
ます。ある場合には、この人がそういうふうと言ってい  
るから、そうだろうと自分は信じているわけです。そう  
いう形で社会の中に知識が存在していると考えよう  
に、根本的な知識に対する考え方の転換が起こるの  
です。

哲学者はもちろん、そういうことが本当に可能かどう  
か、すごく細かく論証してお互い議論するわけですが  
ども、世の中の風潮としては、そういう見方で見るよ  
うになるわけで、より広い意味での外在主義というもの  
が出てくるのです。そして、知識というものは図書館等  
に分散して、社会の中に存在しているものなのだ、知  
識というのは心の中にあるものではない、とすら考  
えるようになってくるわけです。

## 社会性と規範の重視

3つ目が社会性と規範の重視です。後期のヴィトゲン  
シュタインが使った「言語ゲーム」の中身は何かとい  
うと、言語の意味というものはその使用によって決ま  
る、ということです。言語の意味とは、その使用のこと  
である、とヴィトゲンシュタインが後期に言っている  
わけです。

われわれは言語を交わし、交換し続けているわけだけ  
れども、言語ゲームにおいては規則に従っているわけ  
です。そして、この「規則に従う」ということを突き詰  
めていくと、「ひとりだけで規則に従うということは絶対  
ない」というところに行き着くわけです。すなわち、「た  
った一度だけ、たったひとりの人間がある規則に従って

た、などということはありません。たった一度だけ、たったひとつの報告がなされ、ひとつの命令が与えられ、あるいは理解されていたなどということはありません。ある規則に従い、ある報告をなし、ある命令を与え、チェスを一勝負するのは、慣習（慣用、制度）なのである」ということになるわけです。

制度というものを、以前であれば個人から出発して説明しようとしてきたわけです。だけど、ずっと突き詰めて考えていくと、人間の営みというものはすべて制度に浸透されているわけです。制度があるから、すべての人間の営みがあるというふうに考え方が逆転しているということが分かります。こうやって言語に焦点をあてると、主体と世界という関係から、言語を通して世界を理解するというふうになっていくのです。そして、言語を使う自分というふうに見方を変えると、人間の認識の社会性とか規範性みたいなものに行き着くことになります。今までは個人から出発して社会を組み立てていくという見方をしていたのが、そういう説明順序が強く批判されるようになったということが、20世紀の前半から後半にかけての哲学の流れだと思います。

## ドーキンスの『利己的な遺伝子』

そして、20世紀の後半は、進化論の影響を強く受けるようになります。確かに進化論は19世紀後半に出てきているのですが、たとえば、デネットの文章では、「ダーウィン革命がやってきて地球上のあらゆる教養人の精神一や心一の安全で平穏な場所を占領することになるが、ダーウィンの死後100年以上を経た今日でも、私たちはその肝を潰すような意味合いをまだ理解し切っていない」というふうに書かれています。

この流れを変えるのに大きな役割を果たしたのが、ドーキンスの『利己的な遺伝子』という本です。この本については多くの方はご存じだと思うのですが、要約して何を言っているかということをおまします。

進化するということは、形式的には自分自身を複製し



ていくというプロセスに過ぎないわけです。進化のプロセスの中で複製している単位というのを考えてみると、実は遺伝子が自分自身を複製していることになります。それが進化のプロセスだというふうに考えられるわけです。そうするとわれわれひとりひとりの個体というのはどういう役割を担っているかということ、その遺伝子が増えるために遺伝子を載せている「乗り物」にすぎない、というふうに見ることができるということです。そういうふうに進化論の意味を徹底して考えることで、一番小さい単位が複製子の単位となり、進化のプロセスにとっては本質的であると考えられるようになったのです。

一方で、集団を単位として淘汰が働くという考え方が今日でも結構あるし、それを数理的に証明しようとする人たちもいるのです。そういうことを「集団選択」とか「群淘汰」というふうに言います。ただし、ドーキンスはそれに対して、今日でもものすごく批判的です。なぜそれがだめかということ、たとえば素朴な説明の仕方は、こんな感じになります。「群淘汰」の理論とは、単純に言うと、人間というものはお互いに協力するような種であり、ほかの種との関係において、人間のパフォーマンスが上がる、したがって、人間は栄えてきたみたいに説明するわけです。

だけど、ドーキンスがそれに反論するのは、こういうことです。仮に人間がそういう協力的な種だとしたら、周りが協力してくれるので、それを裏切るような突然変異が発生するだろう。周りが協力してくれるのだったら、

その中で裏切るような遺伝子を持った人たちがどんどん得をして、そっちがふえていくはずだ。だから、集団単位でうまくいくという発想はあり得ないと批判するわけです。

もうひとつ重要なのは、ドーキンスが「ミーム」という文化的な複製子が人間にはあるということを使ったことですが、これについては後でお話します。

## 進化心理学

こうした中で、「進化心理学」という学問が20世紀の後半に立ち上がってきます。もともとの発想はダーウィンにもあったのですが、人間の脳は進化の産物であるという観点から、人間の心の動きを解明するようなアプローチです。そういう形で研究していくと、人間の心について結構いろいろなことが分かってくるわけです。たとえば、近親相姦を禁止するということが、どういう人間の脳の進化的な仕組みによって起こるのかということが解明されて、「なるほどな」ということが分かってくるわけです。それが「進化心理学」です。

さらに、これは比較的最近になって進化論の中に起こってきた理論ですが、人間は文化的行動を継承し、伝達するシステムを持っているので、単純な生物学決定論では説明できない、という考え方があります。実は文化と遺伝子も、お互いに関連しながら共進化しているという考え方が出てくるのです。

たとえば、酪農で生きているヨーロッパの一部の社会だと、牛乳を飲んだときに、それを分解する分解酵素「ラクトース分解酵素」を大人になっても保持しているのです。子供のときには人間は誰でも分解酵素を持っているのですけれども、大人になると通常なくなってしまうのです。こうした分解酵素を保持し続けるような遺伝子と、それからミルク文化がお互いにかかわり合って成立してきているということです。そういうような理論も出てくるのです。

そして、心理学・認知心理学における人間観の変化です。これも全部はお話できませんので、特に重要なところ

を言いますと、無意識の比重が非常に大きくなってきたということがあります。たとえば、認知的不協和への対処とかサブリミナル効果の存在というものは、無意識の部分です。さらに戦後になると、分離脳の症例が蓄積されてきます。分離脳というのは、重症のてんかんの患者に対する治療方法として、左右の脳をつなげている脳梁のところを切るという治療方法があったのですが、その手術をほどこした患者がどういうふうになるのか、という観察結果なのです。スペリーというノーベル賞を取った研究者と、ガゼニガという研究者が、それでいっぱい論文を書きます。そうすると右手でズボンを脱ごうとし、左手で履こうとすることが起こるのです。そして、その患者に「どうしてそんなことをやったのか」と訊くと、めっちゃめちゃなつくり話をするらしいのです。実は人間というものは、意図があって行動しているわけではない、ということが見え見えになってくるということです。

さらに、これも決定的なことなのですが、ベンジャミン・リベットという神経生理学者の『マインド・タイム』という本があります。たとえば僕がこの本を取ろうとする時に、「自分が取ろうとしている」と意識するもうすでに350ミリ秒前に、脳の中では運動を始めているということをリベットは計測できたということです。この研究はずいぶん批判されましたけれども、今では完全に受け入れられた研究になっていると思います。

さらに、さっきの外在主義のところでお話したことなのですが、実は人間の心というものは、脳の中にあるものではないのです。人間というものは当然進化の中で脳を発達させていたわけだから、しかも生き延びるためにそれをやってきたわけだから、人間というものは環境と一緒に、組になって情報処理しているというアイデアは当然あっていいわけです。それが「拡張された心」というアイデアで、人間は「脳—身体—環境」の相互作用の中で心の作用を遂行しているということです。この「拡張された心」という理論の革新的なところは、「心」というのは「脳」の中にあると考えてはいけない、という点です。「脳と身体と環境全部一体になったものが心

だ]みたいに考えないと、理屈が合わないのです。そこまで踏み込んでいったわけですね。

さらに言うと、人間というものは、人工物をつくって、それを情報処理に利用するのがとりわけ得意な動物であるという認識に至ります。実は人間というのは、サルなんかとそれほど知性が違うわけではない。だけれども、外的なものを自分の外側につくりだして、それをうまく使って情報処理することで、人間の高い知性は実現されているという見方です。

ひと昔前だと、どうやって人間に言語を使えるようになるような脳の進化が起こったのか、ということを一生涯懸命探すというようなアプローチで研究をしていたわけです。そういう研究者は今でもいると思うのですが、それでも、「拡張された心」という考え方は、むしろ逆の考え方になるのですね。

「人間の脳は、他の動物や自律ロボットが持つ、断片的で特定用途的で行為指向の器官とそれほど違わない。しかし、我々は一つの決定的に重要な点において優れている。我々は、これらの無秩序な資源から複雑で一貫した行動を成型するために、我々の物理的・社会的世界を構造化する名人である。我々は、より少ない知性で成功するように、知性を用いて我々の環境を構造化する」。この環境のひとつが言語だというふうにすら考えるようになる。言語というものは、人間がつくり出して、その言語と人間の脳というのは共進化するという形で人間の情報処理を考えていく、ということです。

## 心の二重過程理論

それからもうひとつ、これも知っておいた方がいいと思いますので現在のことに関する話をすると、「心の二重過程理論」という考え方があります。この概念も行動経済学の本において、普通に見られるようになりました。人間の心というものは、脳の特定の部位と関連づけるのは研究上すごく難しいので、「心の二重過程理論」はそれを整理して単純化した理論なのです。まず「心の二重過程理論」では、人間の心というものは、システム1とシステム

2に分かれていると考えます。

システム1というのは、モジュール化されていて、たとえば人の顔を認識するというような部分です。それをやりながら同時に、われわれは人の音声を聞いて理解することができます。このようにシステム1はモジュール化していて、並列処理が行われるのです。そしてインプットによって駆動されます。われわれは人の顔を見たときに、人の顔として見たくないと思ったとしても、それをやめようとしてもやめられないわけです。インプットがきたら、必ずそれでもって脳が駆動されてそういう処理をしてしまうのです。この部分は個人差が少ないのです。

このように、おそらく進化的には古い部分だと考えられているシステム1という部分と、もうひとつ、システム2という部分から人間の心は成り立っているのです。システム2とは、言語的、論理的な処理を逐次的に行うもので、処理速度がすごく遅いのです。それから人によって個人差があり、うまい、へたという差が大きいのです。ですから、このシステム2は、おそらく進化的には新しい部分だというふうに整理して、人間の心を考えるようになってきました。

経済学の現状についてはだいぶ飛ばしますが、経済学が変わってきたのは、大ざっぱに言うと「ゲーム理論」を取り入れたことが大きいのではないかと思います。私もゲーム理論が専門ではあるのですが、ゲーム理論では比較的簡単に実験ができるのです。このことによって、経済学で実験をするということが当たり前になってきました。実際の人間行動と理論の予測が全然違うということも当たり前のようにわれわれは観察するようになりました。

そうやって考えてみると、それまでの経済学は、合理的な個人というものを想定して、それ以外の代替的な仮説を考えてこなかったのですけれども、そこで現実人間がどう行動しているのかということを変更して対象にするような経済学が生まれてきたわけです。それが「行動経済学」です。

さらに、20世紀の1990年代には、脳の中の活動

について、非侵襲的にfMRI (functional magnetic resonance imaging ; 磁気共鳴機能画像法) でもって計測する技術ができるようになると、その技術を使って「神経経済学」という学問が立ち上がってきました。僕は一時的な現象かなと思ったのですが、どうもそうでもないようです。もう15年ぐらいになると思いますけれども、今日まで続いていて、衰えは見せていないのです。経済学でも人間観がだいぶ変わってきたということが分かります。

もうひとつ、経済学での人間観の変化としてあげられるのが、「人間の超社会性」です。たとえば、「囚人のジレンマ」という非常に有名なゲームがありますが、それについても実験結果を見てみると、理論通りにはならないのです。理論で言うと、「必ず人々は裏切る」という結果になるのだけど、実際には結構多くの人が協力したりするのです。これについては、相当いろいろな論文が書かれています。だけど結局行き着いた先は、先ほど言ったようなさまざまな人間科学のほかの分野の影響を強く受けた回答だと思えます。結局、人間というものは最終的には制度をつくるような本能を持っているということだと思えます。

人間というものは、進化の中で発達の可塑性というのを獲得するに至ったのです。要するに発達の中でどんどん脳が変わっていきけるような存在になったということです。そして、人間というものは模倣的な学習をします。チンパンジーの学習とは違うのです。チンパンジーの学習は「エミュレーション学習」というもので、たとえば、道具でいいものが取れるということを実演して見せると、それを使うと何か餌が取れるんだな、ということを経験して、自分なりにいい方法で取ろうとするのです。

ところが人間は、そういうフィルターをかけないのです。たとえば、実演をする人が、「ここに何かボタンがあって、おでこでボタンを押すと餌がもらえる」ということを示したら、人間の赤ちゃんはまったく同じことをやるわけです。知性とかフィルターを一切かけないで、まったく同じことをやるのです。それがここで言う「模倣的

学習」なのです。おそらくそういうふうになることによって、文化の蓄積が可能になったと考えられるわけです。行動をコピーする際のフィデリティ（忠実度）が高いわけです。全然フィルターをかけなくても、みんなが同じことをやるわけだから、同じことが社会の中に蓄積されていくということが起こるのです。

また、子供が学習していく中で文化依存的に発達していくことになります。言語だって、単にほかの人たちが使っているのを模倣する形で生まれてきたものです。合理的ではなくて不合理かもしれないけれども、かりに不合理なものであっても、無条件に模倣することで言語というものはおそらく生まれてきたのです。そして、規則に従うということも、おそらくその中に含まれているわけです。現在のゲーム理論、あるいは進化心理学とか発達心理学の合わさった行き着く先に、そういう制度をつくり出す本能を持った人間像が生まれてきているのではないかと思うわけです。

## ロボットの叛逆

さっきも申し上げましたけれども、かつては個人を積み上げて社会の仕組みをつくっていくという考え方だったのだけど、その個人に対する見方がこういうふうに変ってきたわけで、それにともない社会をどういうふうに住組んでいくのかということを考えるいくつかの提案が、断片的ではあるんだけど、ようやく出されるようになってきました。

ひとつ目が、スタノヴィッチです。スタノヴィッチは『ロボットの叛逆 (Robot's Rebellion)』という本を書いています。私は日本語訳が出る前に読みましたが、これは当時ではここ数年で読んだ中で僕が一番大きい影響を受けた本です。『人の心は遺伝子の論理で決まるのか』というタイトルで日本語に翻訳もされています。

先ほど「二重過程理論」について、システム1とシステム2から成り立っているということをお話ししました。システム1というものは進化的に古いのです。さっきのドーキンスの議論に戻って思い出してほしいのです

が、人間の脳のシステム1の部分は、遺伝子の利益に奉仕する傾向が結構あるのです。そして、人間の心の中のシステム2の論理的な部分というものは、人間の個体の利益に奉仕するような傾向があるということが言えるだろうというのがスタノヴィッチの考えです。

遺伝子の利益と個体の利益というものは、しばしば反しますよね。たとえば、われわれは避妊をするわけです。しかし、遺伝子の中では避妊なんて概念はないのです。子孫をいっぱいつくればいいのですから。ただどわれわれは、自分の個体の利益を考えるから、避妊するのです。そういうふうに遺伝子の利益と個体の利益が乖離するということを、おそらく認識した動物というのは、人間が初めてなわけです。

さらに、遺伝子の利益に従って、われわれはシステム1も持っているのです。たとえば実験等で非常に不合理な行動を選択してしまうことがよく観察されるわけです。おそらくそれはシステム1が勝手に先走っているわけです。そして、実は不合理な結果を選んだ被験者に対して、「後からよく考えてください」と言うと、「やっぱり違っていた」というふうに自分の行動を正そうとするわけです。人間が不合理な選択をする場合のシステム1とシステム2の関係はそんなふうになっています。

そうすると人間の心というものは、よくよく考えてみると、非常に古い時代に進化的に適用してきた心の部分を引きずっているということになります。ただどわれわれの現在住んでいる社会は、古い時代とは全然違って、合理的な情報処理もしなければいけないという中にいるわけです。こういうふうに考えたときに、スタノヴィッチはどのように結論づけたかという、「我々の心を合理的なほうに改革すべきだ」「個体の利益のために立ち上がるべきだ」と言ったのです。これが「ロボットの叛逆」ということの意味です。要するに、遺伝子に支配されている人間の部分ではなくて、自分の個体の利益のために合理的な行動ができるように、われわれの認知を改革していくべき、と考えたわけです。

それからもうひとつ、先ほどドーキンスに関連して

「ミーム」という存在があると言いました。「ミーム」とは、文化的な情報の単位で、これも遺伝子と同じく複製子です。このミームにとっても、われわれは宿主として乗り物としての役割を果たしています。たとえば、「宗教的信念」というものもミームです。「ミーム」はそれ自身のロジックで広がっていくのです。われわれの頭を媒体として広がっていく、というふうに見ることができるわけです。

そして、信念(ミーム)というものは、それが真実であるとか、その信念を抱いている人間の役に立つかどうかにかかわらず、伝播していくことになります。たとえば、「殉教」というのもそうでしょう。「殉教」は、明らかに個体にとってマイナスなわけですが、ミームとして広がっていくのです。このことに対しても、スタノヴィッチは「叛乱すべきだ」というふうに言うわけです。これら遺伝子とミームという2つの複製子に対して、個体の利益を重視した叛乱を行っていくべきだとスタノヴィッチは主張しているのです。スタノヴィッチは、私たちが複製子の狭量な利益を超えて、独自の自律した目的を明確にするために必要な、進化理論上の洞察と認識改革をひっくるめて「ロボットの叛逆」と呼ぶことにしたい、というふうに呼びかけています。

## 伝播委任投票システムと分人民民主主義

それから、20世紀の人間観の変化のなかで、人間は結構動物的なのだということが分かってきた、すなわち、人間の自然主義的な理解はずいぶん広がってきたので、「それを許容していこう」または「それで楽に生きていけるように、むしろ社会の方を変えちゃおうよ」という考え方が登場します。ある意味では、上のスタノヴィッチとは逆の考えになります。

情報社会学の研究者で鈴木健さんという人が、『なめらかな社会とその敵』という本の中で、非常にアウトスポークンに書いているわけです。そのモチベーションは自然主義的ということができると思います。ヒュームのような例外もいたけれども、啓蒙主義の社会思想の多くは、



「人間は細胞から構成された動物であり、生態系の一部として進化的な位置づけを持った生命の一つであるという事実」を完全に無視するか、少なくとも誤った認識を持っていた、とのことです。私たちは、まず生命を語り、その延長線上の存在として人間と社会制度について語らなければならない、と鈴木さんは書いています。

また、「自由意志があるから責任をとるのではない。責任を追及することによって自由意志という幻想をお互いに強化しているのである」とも書いています。科学的には、もう自由意志が事実の上であり得ないということは分かっているわけです。現代社会は、大きな政治的レベルからミクロで個人的なレベルのものまで、責任追及することによって自由意志という幻想を産み出してきた。だが、このトレンドは大きな曲がり角に差しかかっている。人間を合理的で機械的な存在として他の動物と異なるものとしてみなすのではなく、感情的で身体的な動物の延長線としてやや特殊な能力を進化的に獲得しただけの存在に過ぎないと次第に考えるようになってきた。そのような人間観、社会観に基づいて、全体主義にも個人主義にも自由主義にも陥らない、新しい思想を切り開いていきたい、ということが彼の宣言となっているわけです。

ただ、実際の具体的な提案になると非常に難しいことが書いてあります。たとえば、鈴木さんは「PICSY」という新しい貨幣の提案をしています。これは、「伝播投資貨幣」と呼ばれるものです。この「PICSY」がどういうふう

に現行の貨幣と違うのかということ、こういうことです。つまり、私が払ったお金、各人の使用する貨幣単位の価値が、「PICSY」の場合、その人が社会にどのくらい貢献したかということによって変動するのです。その貢献度それ自体をコンピュータで計算できるような仕組みを提唱しているのです。誰が誰にどれだけお金を払ったのかということについて、巨大な行列が書けるわけです。その行列の固有ベクトルを計算することで、その人の社会の中におけるウェイトが計算できる、という貨幣を鈴木さんは提案しています。

あるいは、むしろ「伝播委任投票システムと分人民民主主義」というアイデアの方が分かりやすいかもしれないですね。われわれは、1人1票だと考えているけれども、たとえば僕が1票持っているとして、そのうちの0.3票は中谷先生に委任します、とするわけです。もちろん直接誰かに投票するというかたちがあってもいいのですけれど、この「委任投票」も、さっきと同じように行列になるわけです。その固有ベクトルを計算すれば、多くの人から委任された人のウェイトは当然大きくなるわけです。そういうようなシステムをやりましょう、と鈴木さんは提案しているわけです。

近代社会では、われわれは完全に自律的な主体として行動することが求められているのですが、社会が複雑化するとその負荷は大きくなってきます。ひとりの人間に対して、「あなたは自律的で合理的な人間なのだから、意思決定して自民党に入れるか、民主党に入れるか判断しなさい」ということを強要するシステムが今の民主主義です。そうではなくて、それをなめらかに「0.3は民主党、0.7は自民党」みたいにしていた方が、われわれにとっては居心地がいいだろうという考え方が「伝播委任投票システム」と「分人民民主主義」です。

## 啓蒙主義2.0

それに対して、「啓蒙主義2.0」という言葉を掲げて、むしろこういう自然主義的な生き方に対して反対する社会構想を考える人も出てきました。たとえば、ジョセフ・

ヒースという哲学者です。彼は20世紀後半に明らかにされてきた自然科学的な人間に対する知見を否定するわけではないのです。むしろ積極的に受容しています。だけれども、あまりそういう自然主義を野放しにしまうと、駄目だと言っています。一方で、ハイトという有名な道德心理学者がいて、彼は「人間なんてどうせ道德と云って直観で決めているに過ぎない」みたいなことを論文で書きまくっていて、「直観を大事にしなければいけない」ということを言ったりしています。

そういう風潮・状況に対して、「人間は合理的に物を考えることができる存在であって、そこを捨ててはいけない」というのがヒースの根本的な発想だと思います。もし、「啓蒙主義 1.0」というものが仮にあるとすると、きょう一番最初にお話したように、それは「個々人が合理的で自律的な存在である」というところから始まっているわけです。それはかなりフィクションである、実はそんなことはないのだということが、20世紀後半の科学で明らかになってきました。だから、われわれはもはや「啓蒙主義 1.0」に単純に復帰することはできないわけです。

ヒースは、「個々人は確かに合理的な存在ではないかもしれないけれども、社会集団的には合理的な意思決定をするような仕組みをつくっていきけるはずだし、そういうふうにしていこうよ」と言っており、それが「啓蒙主義 2.0」なわけです。

では、それをどうやってつくっていくのかということ、たとえば先ほどの「拡張した心」というアイデアに頼ることになるわけです。実は人間が合理的であり得るのは、ひとりひとりが合理的であるからではなくて、たとえば、文字であったり、皆さんとこういう対話する機会があってそうした議論の中である程度一貫した合理的な考え方をつくっていきたりしているわけです。人間は環境の中で、環境に助けられながら、合理性を確保しているというふうに言えるわけです。だとすれば、人間の合理性を引き出すような仕組みを意識的に導入していこうということが、ヒースの「啓蒙主義 2.0」という考え方なわけです。



最後になりますけれども、ヒースは「スロー・ポリティクス」の提案をマニフェストとして掲げています。ファスト・ライフとか、ファスト・ポリティクスは愚行である、というふうに彼は考えているわけです。「情動の政治」みたいなものですね。それに対して、理性の擁護をしなければいけないというのが、ヒースの主張です。そして、われわれの理性の擁護は3つの柱に依拠しなければならない、としています。

第一に、それを可能にする条件をよりよく理解しなければいけない。これは認知科学であり、どういうときにちゃんと合理的になれるのかということを知ることが重要だということです。第二に、われわれはこれらの諸条件を改善する方法について熟慮しなければならない。そして最後に、われわれはこれらの改善をもたらすことを目指す集団的行為に従事しなければならない、ということです。

ということで、情動というか、感情に任せるといって、動物的な側面に走ってしまう今の風潮に対して、あるいは、ほっておけばそういう人間観が蔓延して、不合理なままに生きていくことが容易になる社会に流れていくかもしれないということに、対抗するべきだという議論をヒースはしているのだと思います。

先ほど紹介した、「なめらかな社会とその敵」という本を書いた鈴木健さんは、ITのベンチャーをみずからやっている人でもあります。そして、こういうことを構想するにあたっては、ICTがかなり彼の中で影響しているわけ

です。ご存じのようにツイッターとかフェイスブックがはやっているわけですが、どういうものがはやるかという、人間の感情に訴えるものの方がはやるわけでしょう。ツイッターだったら、断片的な自分を表現できるわけです。本当に短いテキストで、そのとき思ったことを断片的にパッと書きちゃうことができるわけです。合理的な自分というものを保持して発言するとなると、異様に長いこと書かなければいけないわけだけども、そんなことやっていられないような時代で、断片的な自分を駄々漏れで出していくようなシステムになっているわけです。

仮に僕がヒースの立場に立って言うとする、「だけど、ツイッターとかフェイスブックという仕組み、そしてICTの仕組みも人工物だ」ということになります。

「人工物との関係で自分の行動を変えていく」ということが今の人間観だとすれば、ひとつは人間の「分人」が楽になるような人工物の作り方もあるかもしれないわけです。けれど、逆に人間の自律性を高め、意識していくような人工物の設計の仕方だってあり得るのではないのでしょうか。それが僕が鈴木健さんに対して反論していることで、おそらくヒースもそういうことを考えているのではないかと思います。

一方で、僕と鈴木さんの共通の友人で、ゲーミフィケーションを研究している友達がいるのですが、彼の話によると、人間はゲームに結構はまるのだけれども、ゲームを使った英語教材で成功した例はなかなかない、とのこと。それはどうしてかを考えてみるのも非常におもしろいのではないのでしょうか。

もしかしたら、そのときの自分の気分に合わせて行動していくことを許容するような人工物の方が、ずっと設計しやすいということなのかもしれないですね。だけれども、合理的な一貫性を持った自分というものをむしろ補強していくというか、そうした行動を実現しやすくするような社会の仕組みとか、ICTのあり方を設計する可能性もあるのではないかと考えているところです。以上です。(拍手)

## Part2 : 質疑応答

**【太下】** 瀧澤先生、どうもありがとうございました。

事前にレジュメに目を通された方は、とてつもない難しい話が飛んでくるのではないかとあって怖いと思うのですが、お話を聞くと何となく理解できたような気がしますよね。ところで、その理解できたような気がするあなたは、1時間前のあなたとつながっているあなたでしょうか。みたいな禅問答は置いておくとして、今最後にご紹介いただいたヒースについては、瀧澤先生は謙虚なのであえてお話しされませんでしたけど、瀧澤先生自身の訳で本が出版されています。時間があつたら読んでみてください。

というわけで、ヒースも言っている理性の擁護のための3つの柱、理解し、熟慮し、そして集団的行為、それを実践しているのが、この「巖流塾」ではないかと思えますので、巖流塾を代表して瀧澤先生にディスカッションをお願いしたいと思います。最初に西尾さん、お願いします。

**【西尾】** ありがとうございました。西尾と申します。

身近な問題に引き寄せて理解したいなと思うのですが、私は自治体に勤務していたことがありまして、4年ほど自治体の部長職をやっていて、自治体での意思決定の現場にいたわけです。そのときに、最後のポリティクスの話になりますが、なかなか合理的な



西尾氏

政治的意思決定ができない現実を肌で強く感じています。具体的には不利益の配分問題を取り上げたいんですが、公共施設の老朽化問題というものに取り組みました。公共施設は、高度経済成長期に大量につくられたものが一気に老朽化するので、今後はその維持更新の費用を見積もると、とてもやりくりできない。デフォルトしてしまうということが非常に明らかなのに、今から施設を減らしていこうとか、そういう意思決定がなかなかできないという状況を経験しています。

つまり総論として、全体として減らしていかなければいけないことはみんな理解してくれるのですが、自分の身近な施設を具体的に減らすということになると、各論では反対している。総論賛成、各論反対という状況が出てきています。こういったときに、どうしたらうまく合理的な意思決定に導いていけるのかなということを考えています。

それに関連してもうひとつ申し上げたいのが、市民アンケートを取ってみますと、8割から9割ぐらいの人は賛成してくれるんです。公共施設は問題があるから、減らしていくことに賛成であると言ってくれるのですが、みんなが集まって議論する場になると、少数の反対意見が非常に強くなって、多くの人の良識的な意見が全部隠れてしまって、最終的にそれが議会に持ち込まれると反対意見で、できないということになってしまう。

最後の方の話で、実は逆になるのかと思うのですが、人々の中には非常に良識的なものがあるって、それをうまく集めて意思決定に反映できれば、非常に合理的な集団的な合理性が確保できるのではないかと、思うわけです。そういう可能性を追求したいと考えているんですが、それについてコメントいただけるとありがたいと思います。

**【瀧澤講師】** 今のお話を伺っていて、NHKの「クローズアップ現代」で、自治体で意見が非常に対立している状況の中で、どうやって解決するのかという番組を放映していたことを思い出しました。



瀧澤講師

**【西尾】** 先生、その番組に私も出ていました。

**【瀧澤講師】** ああ、そうですか。

要するに最初に共感をつくっていくこと、それがあって初めて合意に到達できる、ということですね。それを実践されているということはすばらしいと思うのです。でも、それが本当の知恵だと思うのです。20世紀後半の人間科学をよく理解したうえで、感情的な人間をどうやって合理的な意思決定に導いていくのか、ということに関しては、非常に賢いやり方だな、と僕は見て感心していたのです。

**【西尾】** そのことに関連してもうひとつお聞きしたいのですけれども、私が取り組んだのは、ワークショップ等を非常に丁寧に時間をかけてやることによって合意をうまく形成していくことは非常に手応えもあって感じられたんですが、ただ、それはものすごく時間とコストがかかる。しかも、そこに関係できる人も非常に限られてきますので、大きなマスでの合意形成というのは、とてもこのやり方では間に合わないな、手遅れになるなというふうに感じました。このスロー・ポリティクスというスローというところがすごく大きなネックになって、それを考えると実現できないのではないかとことさえ思ってしまうんです。その点についてはいかがでしょうか。

**【瀧澤講師】** それは西尾さんが、すばらしいメカニズムを考えていただけなのではないかと思います(笑)。たしかに、小規模の場合と大規模の場合とは全然違うでしょ

うし、単に共感とか感情だけでは済まないと思います。その問題の切り分けとしてはいくつかありますよね。それこそ法律も含めて、仕組みをどうしていくのかという問題もあるでしょうし、感情とか共感の問題もあるでしょう。それらの問題がいくつか組み合わさっているわけですから、やはり感情や共感の問題だけでは解決できないのではないかと思います。

**【西尾】** ありがとうございました。

**【太下】** それでは次に、上野さんお願いします。

**【上野】** 今のことに少し関係するのですが、意思決定の方法といいますが、政治のあり方として、巖流塾では昨年度、東先生をお招きしまして、今の時代はICTを活用することによって、ルソーが『社会契約論』で提唱したような「一般意志」を容易に可視化することができる。また「一般意志」は、単なる個人の意志の合計ではなく、「人々の間でコミュニケーションがない」としたら、「プラスとマイナスがぶつかり合って、相互相殺されることで出てくる」ため、「間違えることがない」という話を伺いました。言い換えれば「ノーコミュニケーション」、「熟議なしの政治」というところなのですが、先ほど最初の概要のところ、ICTの進展も大きな影響を与えるということをおっしゃっていましたが、今西尾さんが言ったような意思決定の難しさのところ、ICTの発展はどのような影響を及ぼすと考えられますでしょうか。

**【瀧澤講師】** もしかしたら僕が完全に理解していないのかもしれませんが、東浩紀さんの『一般意志2.0』とか、先ほどの鈴木健さんの「なめらかな社会」というような話をいろいろなところで聞いて、同じような感想を抱いているのです。そのイメージとしては、たとえば、ニコニコ動画の画面に変な表現や主張がいっぱい出てくるけれども、そういうものが可視化される時代になったので、それを見ながら政治家が政策を決定することになる、という話ではなかったですかね。

**【太下】** 東さんも、ICTという仕組み自体で何かすごいことができるということではない、と考えているようで

す。

**【瀧澤講師】** たとえば、この三菱UFJリサーチ&コンサルティングのすごくまじめな社員が、実はネットではヘイトスピーチのような発言をしているとか、そういうまさに「分人」というか、ICTというものは、多かれ少なかれ違った人格で違った局面にわれわれが存在することを許容する仕組みでしょう。でも、それをつくって何が楽しいのだろうか、と僕は思うのですよね。

西尾さんの話ではないですが、ICTを応用して新しい建設的な仕組みをつくることは、まだ誰もうまくつくっていないわけですからとても難しいわけです。難しいのですけれども、ある程度自己責任があるような世界をつくれないうらうかと考えています。少なくとも実際の現実社会の中で、自律的で責任を持った個人を補強して、社会の解体に歯止めをかけるぐらいの仕組みが何かできないのかなと思っています。

鈴木健さんから聞いた話なのですが、掲示板等でのじめがはやったときに、逆に励ますとポイントがつくようなサイトとか、誰かを励まして元気にしたということが評価されるようなウェブサイトが実際にあるのだそうです。そのサイトを僕も見ることがあるのです。たとえば、就職活動をやっているんだけど次々落とされていく学生たちに「そのサイトで励ましてもらえ」ということを、僕も言ったことがあります。これはちょっといいアイデアではないかと思えます。

**【上野】** 続いて、実はわれわれ事前に、先生が2008年に当社の機関誌に寄稿して下さった「グローバル・キャピタリズムと日本企業」も読ませていただいておりました、それに関連して、もう前の話なのでお考えが当時と変わっていることもあるかもしれないのですが、ご質問させていただければと思います。

2008年の当社の機関誌において、先生が、「市場取引はこれまで考えられてきた以上に“社会規範”に規定されている可能性が大きい。社会規範によってコントロールできる余地が存在している」、「環境問題という世界全体が共有する問題意識に基づいて、グローバル



上野氏

な社会規範が生み出されつつあるように思われる。今後のグローバル経済の行く末には、単なる資本の論理ではなく、こうした社会的価値観が大きな影響を与えるようになるだろう」と書かれているんですけども、現在の市場は、当時に比べて、社会規範によってコントロールできているとお考えになりますでしょうか。

われわれとしては、CSRからCSV等も言われているものの、まだ環境問題対応等は仕方なくやっている会社が多いのかなと認識していますし、発展途上国等ではまだまだ環境意識も低い気がします。また、リーマンショックで一時期下火になっていた投資銀行も米国で再び活発化して、不動産投資バブルが起これいるとも言われています。現時点ではまだまだ市場は、社会規範によってコントロールできていないように思えます。市場は社会規範によってコントロールできるということを言われていて、もし今できていないとすれば、いつそういうふうになるか、どのようにして、どういう主体がどういうことを行うことによってそれは実現するとお考えになりますでしょうか。

もう一点は、同じ論文の中で、日本企業の役割についても先生はおっしゃっていて、「日本企業は、グローバル化する経済と日本の経済システムのインターフェイスを形成するとともに、日本的価値観に基づく独自の貢献を世界経済に対して積極的に発信していくべき」と書かれています。

実は、巖流塾ではこのことを、これまでに何度も、日

本は、瀧澤先生が書かれているこうした役割を果たすべきだという議論を行ってきていまして、今年で5年目なんですけれども、たとえば、株主利益よりも従業員を家族のように大切にすることや労使協調、完成品メーカーと部品メーカーとの長期にわたる取引関係をベースとした共同技術開発等、日本企業の持つ優れたものを大事にしていくべきだという議論をしてきています。

ただ、日本的価値に基づく雇用関係や取引関係を日本において実践することはできたとしても、その価値観をどのような方法で世界に発信できるのか、普遍的なものにできるのかについては答えが見つからないままできている状況にあります。

こちらの機関誌にご執筆いただいて以降、日本企業は、日本的価値観に基づく独自の貢献を世界経済に対して積極的に発信してきたと思われるのでしょうか、というのが2番目の質問で、もし、そう思われる場合は、具体的な企業事例等を教えていただければありがたいです。

**【瀧澤講師】** 1点目についてなのですが、市場取引と社会規範との関係というものは、一部分かっていることもあるけれども、非常に複雑だと思います。一部分かっていることは何かということについては、たとえば、これも私が訳した本なのですが、ジョン・マクミランという人の『市場を創る』という本があります。その本の中で書いてあることなのですが、実は市場がうまく機能するためにも、社会が安定していて、人々を信頼できるような社会じゃないと、市場はうまくいかないんだよ、ということです。

しばしば市場原理主義はいけないということを主張したいがために、「市場原理主義みたいな考え方に陥っていくと、人々が利己的になって、社会の道徳的な基盤を覆してしまう」という考え方を表明する人がいます。たとえば、藤原正彦さんの『国家の品格』にはそういうことが書いてあります。

ところが、人間の公平性に関する実験をしてみると、

結構おもしろい結果となります。「最後通牒ゲーム」という有名なゲームがありまして、そのゲームでは、一方のプレイヤーに「もしも10ドルあったら、相手プレイヤーとどういうふうに分けるのか」ということを提案させます。たとえば、「五分五分」とか、「自分が8で相手は2」とかですね。それを聞いた相手が、提案をアクセプトする場合にはそのままお互いにお金をもらうことができるのだけれども、相手プレイヤーが「だめ」と言った場合には両方がゼロしかもらえない、というゲームです。

実は合理的なゲーム理論では、プロポージャー、すなわち「最初に提案する人が全部取っていく」ということが均衡解になるのです。なぜならば、提案を聞いた人は、合理的に考えるとゼロになるよりは少しでももらった方が得なので、だから自分にとってはかなり不利な分け前でも、受け取った方がいい、という結果となるのです。それを見越すと、最初の提案者は、ほとんど自分が取るような提案をする。それが合理的な解なのです。

ところが、1991年ぐらいに、私の師匠のひとりでもある東大の奥野先生が、アルビン・ロスらと一緒に、実際に実験してみた有名な論文があるのです。その実験によると、だいたい「五分五分」に分けるという結果になるのです。これは、合理的ではない判断が一番典型的だという例だと思うのです。

しかも、実はアメリカとユーゴスラビアとイスラエルと日本の4カ国で比較実験をやっているのですが、そのうち2つの国は6:4で分けるという傾向があったそうで、残りの2つの国は50:50で分ける傾向があったそうです。僕は、この話を学生によくするのですが、「どっちがどっちだと思う？」と尋ねると、たいていは「アメリカの方が貪欲だから、6:4だろう」と答え、そして、「日本人はフェアだから50:50だろう」と答えるのです。でも正解は逆なのです。そういうおもしろい実験結果もあるのです。このように、実験でそれぞれの社会におけるシェアリングの文化、分割

の仕方に関する違いというものが分かるのです。

そして、この4カ国の比較実験の論文がもとになって2000年を過ぎてから、マッカーサー財団が巨額の資金を提供し、多くの文化人類学者と経済学者を集め、4大陸・12カ国、15の小社会で同じ実験を行ったのです。その結果分かったことは何かというと、分割の仕方のバリエーションは思ったよりも大きかったということです。具体的には、ほとんどのソサエティで50:50になるのではないかと考えていたら、そうでもないという結果となったのです。そして計量分析ができるぐらいの多くのデータが取れたので、それぞれの社会でどのぐらいの市場取引が行われているのか、どのぐらい大規模な集団で生産活動をやっているのか、等のデータと突き合わせて、そのこととフェアな分割との関係があるかどうかを調べてみたのです。

そうしたら、もともと市場取引にさらされている社会の方が、50:50に分けるという傾向が明確に出てきたということです。小社会の場合、市場社会にそんなにさらされていないので、分割の比率は50:50にならないのですね。これはひとつの実験の例ですけれども、市場取引と社会規範の関係はかなり複雑なものがあると思います。

もうひとつ、実験の結果で分かっている知見を申しあげます。たとえば、被験者になんらかの作業をやらせるときに、あたかも市場取引のように、「お金をあげるから、あなたの仕事としてやってください」というふうにして作業をやらせると、「困っている人がいるから、かわりにやってください」というふうにして作業をやらせると、どちらの方が仕事がかどるかという実験です。実験の結果、「困っている人がいるから」という方が仕事がかどったそうです。どうやら人間というものは、経済取引をやるのと、社会規範みたいな関係の中で行動するときで、脳の中でモードを切り替えているようなのです。そういうことも実験の結果、分かっているのです。

ここでちょっと複雑なことを言って申しわけないの



ですけれども、21世紀は、こうした市場取引と社会規範を、もしもできるならばうまく組み合わせることが求められている時代なのではないかと思うのです。たとえば、「教育」を全部利潤という価値観だけでやってしまったら大変なことになるわけでしょう。かといって、すべてを善意だけでやっていたら、非常に非効率的な組織になってしまいます。医療もそうですね。このように、市場取引と社会規範の間にある活動が、社会の中で占めるウェイトが高くなってきているのが現代のひとつの特徴であると思っています。ですので、この分野はもう少し研究しないといけないうわけですね。

ジェイン・ジェイコブズという都市論で有名な人が『市場の倫理 統治の倫理』という本を書いていて、その中で、市場の倫理と統治の倫理というものは水と油で、それを一緒にしてはいけない、というふうに言っています。それらをまぜると、いいところ取りではなくて、悪いところが両方とも出てきてしまう、という話をしているわけです。ショートショートで有名な星新一さんの作品に、「メロンのように大きな実がブドウのように沢山なる」ことを期待して交配した果物が、「ブドウのように小さな実がメロンのように少しかならない」新品種になってしまったという話があります。それが「ブロン」ですね。でも、それに対してジェイコブズは、そんなに明確なエビデンスを出して書いているわけでもないのです。僕は、市場と非市場の2つの要素をどこまでどういうふうに組み合わせることができるのか、ということはすごく重要な 이슈に

なっていくのではないかと、思います。

今までは市場取引というのは匿名的なものでしたけれども、現代はそれこそICTがあるので、すべての取引の情報を取るということもあり得るわけです。実際に一部ではそうなっていますよね。たとえば、牛肉を販売する時に産地を表示しないとイケないということもそうです。この例のように、人の目を市場取引の中に入れていくことで、社会規範が持っている、行動に対する圧力を利用することができるのではないかと、いうことを思っています。

ただし、本当にそうすることがいいのかどうかということには自信を持ってないのです。やはり、匿名性があるから、市場というものはプラス面がある可能性もあると思っていて、そこは現時点でも明確な解答を持っていないところです。

それから、日本企業が日本的な価値を発信していくべきという話ですね。ひとつの方法としては、もしも企業がそれを発信していくということであるならば、日本企業はそれをやって徹底して成功して市場で勝つということでは方法はないだろうと思います。「やっているのです」と言いながら負けていたら、それは全然説得力を持たないだろうということです。でも、そういう日本的な思考方法で会社の組織をつくり、それがベストプラクティスだと思えるようなことをやって、日本企業が徹底的に成功する可能性はあるのかな、と思うのです。

もうひとつは、私がずいぶんお世話になった青木昌彦先生が研究されてきたように、日本企業の行っているプラクティスを経済合理的に説明するということです。たとえば、従業員を大事にするということ等、日本企業のやっていることには、企業としての合理性が絶対あるはずなので、それを青木先生のように、理論的な方面からロジカルに説明していく、という方法がもうひとつあると思います。それはやはりやらなければいけないでしょう。もしかしたら、本当は僕がやらなければいけないのかもしれないですが、そういうふう

に思います。

**【上野】** ありがとうございました。

ひとつ目の方で非常に興味深いと思ったのが、われわれは実は市場を規範でコントロールできるということなんです。もともとはたとえば、本日のお話にあったようなポリティクス等でコントロールをしていくと思っていたのですが、先ほど先生がおっしゃったようにすべての市場取引にICタグをつけるというのもひとつで、市場取引にさらされていけば、むしろ人間は自然と社会規範を身につけ、良識を身につけて行動するようになる、そういうことだと理解してよろしいのでしょうか。

**【瀧澤講師】** いえ、それは本当に難しいことですよ。たとえば、現在の市場での取引を調査研究しようと思っても、株式市場で取引するときの人間と、商店街でおばちゃんと話しながら取引するときでは全然違うと思うのです。でも、アダム・スミスも言っていますけれども、人間というのは取引する動物なわけです。それは本能に埋め込まれていて、ある程度異質な人と出会って商品を交換していくということは、かなり社会規範に近いレベルであるのではないかと思います。

もう少し大きい話をすると、ドイツの社会哲学者のハーバーマスは、こんなことを言っています。もともとは社会で商品を取引するということと、コミュニティの中で生きていくということは、そんなに違う話だったかもしれない。けれども、市場取引するところだけを独自の空間として、自立させていったという面が近代という時代にはあるわけです。それはハーバーマスの言葉で言うと、「システム」という言葉になり、彼は「システムと生活世界」という言葉で表現しているわけですが、その「システム」の暴走に対する批判はありうると思います。ハーバーマス自身もたぶん検討していると思うのですが、われわれの生活世界、コミュニケーションの場としての共同体的な生活世界から、どこまで「システム」の暴走を許していいのか、という問題のとらえ方もできるのではない

かと思えます。

**【上野】** ありがとうございました。

**【太下】** ほかに質問ある方はいらっしゃいますか。では、宮本さんどうぞ。

**【宮本】** 本日は、おもしろいお話をありがとうございました。

先ほどのお話の市場取引と社会規範の関係において、結論として市場取引と社会規範を組み合わせるべきだという話は、個人的には非常に賛同しているところですが、これは難しいなと思うところがあります。市場取引は目に見える、つまり、数値・理論等での説明・立証が割と簡単なのかなと思う一方で、社会規範というものは目に見えないとか、これが重要だということをロジックで示しにくいかなというところがあります。そこで後者の社会規範について、どのように合理性や必要性を立証するのかというところについて、何かお考えがあればいただきたいと存じます。

**【瀧澤講師】** たとえば、「エチケット」とか「ルール」というものと、「道徳」では、全然重みが違うように感じられますね。社会規範はそれらのちょうど真ん中ぐらいかなと思うのです。でもヒースは、みんな基本形は同じだと考えているのです。僕はヒースの本を翻訳しましたが、結構ヒースの社会規範論に共感しています。社会規範というものは、どういうふうに生じてきたかということ、人間がほかの人を模倣して同調行動をとるといって、規範に同調するような行動をとるところに社会規範の基礎がおそらくあるだろうということです。本能的にみんなと同じ行動をとるところが社会規範の基礎の部分だろうと思います。だから、もともとは社会規範が合理的とは必ずしも限らないわけですし、逆に言えば合理的である必然性なんてまったくないのですね。

たとえば僕は、きょう皆さんにお会いするためにネクタイしています。実はふだんはネクタイを全然していません(笑)。この「ネクタイをする」ということも、考えてみたらひとつの文化であり、社会規範ですけれ

ども、このことが合理的とは思えないですね。これはハイエグ的な社会の見方になるのですけれども、われわれの社会規範とか文化というものは、もともとは不合理なものの積み重ねの上で成立していると思うのです。さっきも言いましたけれども、市場取引に社会規範を入れることは可能かもしれないけど、逆にそれは危ないことかもしれないと思うのです。社会規範というものは実はそんなに合理的なものだというわけではないのです。

また複雑な話をして申しわけないのですけれども、一方で人類には、社会規範自体を合理的に改革してきた歴史があるわけで、このことがヒースの『ルールに従う』という本で強調されています。社会規範というものは、単に不合理なものの積み重ねででき上がってきたものではなくて、それ自体がわれわれの合理的な改定の対象になるものである、ということです。社会規範だって変わりますよね。たとえば、電車の中での携帯電話の使用について、初めは「一切使わない」と言っていたのが、最近は「この場所では使わない」というふうに変わってきています。そういうふうに変化していくことについて、僕は非常に興味深く観察しているところですが、人類は実際にそういうことをやってきたということですから、そういう意味では、いい社会規範に向けた改革もこれからわれわれはできるのではないかと考えています。それは、きょうのスロー・ポリティクスのように、政治的な言説の中で徐々にでき





宮本氏

てくるのではないのでしょうか。

**【宮本】** ありがとうございます。

追加でよろしいですか。社会規範を合理的に変えてきたというか、変えてきつつあるというところについて、社会規範を合理的に変えるというところが行き着くと、すべての社会規範がひとつのところに収斂されると思われませんか、それとも最終的には収斂しないと思われませんか。

**【瀧澤講師】** 収斂しないと思います。なぜならば、「合理的」と言ったときに、合理性の基準というものがひとつでは絶対ないからです。社会というものはものすごく複雑なのです。せいぜい人間がやっていることというものは、今あるものを断片的に改良していくことだと思います。これもハイエクの考え方にはありますけれども。ハイエクは、「ピースミール・エンジニアリング」という言葉を使っています。

先ほどお話しした通り、人間社会というものは不合理なものの蓄積なので、「そんな不合理なものは全部取っ払ってしまえ」と言って、ゼロから社会を構築しようとしたのがフランス革命の時代でした。ハイエクは、そんなこと絶対にやってはいけないと言うわけです。それはどうしてかといったら、人間はおばかさんなのでそんなことは絶対にできないということです。ハイエクが、社会主義とかフランスの啓蒙主義等の設計主義を批判するのは、こういう理由ですね。社会を改良していくということは、ピースミールに積み重ねてい

くことなのです。だからといって合理的ではないということではなくて、今あるものよりもより合理的なものに変えていくことはできると思うのです。そういうふうにして達成される合理性というものは、もともと複雑なものが存在しているわけですから、単一の合理性ではあり得ないと思います。

もしも「合理性」という言葉でひとつの単一の合理性を考えるならば、合理的に改定できることはひとつのものに行き着くだろうというロジックになると思うんですが、そうはなっていないのではないかと思います。

合理的な改定ということは、ピースミールに改良していくということであり、すごく小さい合理性という意味だと思います。経済学の分野で「パス・ディペンデンス (Path Dependence)」という言葉がありまして、これは「経路依存性」「歴史的経路依存性」という意味です。たとえば、一番有名な事例としては、皆さんが使っているパソコンのキーボードです。パソコンのキーボードは左手の上段がQWERTYのキーとなっています。それをクワータィ・キーボードと言うのですが、これがなんで今使われているのかということは何と不思議でしょうがないわけです。このキーボードがつけられたのは、反論や異論もあるのですが、基本的には19世紀末にアメリカでできたとされています。そして、タイプライターのタイピストが、あまり早く打ち過ぎてしまうとアームが絡まってしまうので、あまり早く打ちすぎないように、そこそそ早く打てるというためにできてきたのがクワータィ・キーボードなのです。だけど、いったんこの配列が採用されると、今はコンピュータなのでアームなんかなくてもかかわらず、この配列が一般化しているわけです。

実は僕は富士通の親指シフト・キーボードをめちゃ早く打つことができます。いえ、打てましたという過去形が正しいですね。だけどそのキーボードは全然はやらなくて、いまだにクワータィ・キーボードが主流となっています。そういうことを「歴史的経路依存性」と言うのです。つまり、われわれの社会の仕組み

というのは、歴史的な過去の遺物を背負って、その中でしか変わらない、という考え方ではないかと思うのです。「合理性」と言ったときに、ゼロからつくれるという合理性を僕は想定していなくて、社会の中で部分的に改定していくような合理性をイメージしています。そうすると、もともとの歴史の中での経路依存性というものが働いているとすると、社会規範をみんなが合理的に変えていけば、同じ社会規範に行き着くかという、そうはならないのではないかと思います。

**【宮本】** ありがとうございます。

**【太下】** ほかにどなたかいらっしゃいますか。では、美濃地さんどうぞ。

**【美濃地】** きょうはありがとうございました。美濃地と申します。

難しい話が多かったので、聞く前の自分よりか今の自分の方がよく分かったとは思っています。私が関心を持ったのは、鈴木さんの具体的な提案の部分です。それで、2つお伺いしたいことがあります。ひとつは本当に単純なことなのですが、鈴木さんの言葉ですけれども、「伝播投資貨幣」とか「伝播委任投票システム」という名称となっていますが、その「伝播」の意味がよく理解できなかったの、よくご存じであれば教えてくださいたいと思います。

それから2つ目は、どちらのシステムもおもしろく、実現できればいいと思えるのですけれども、特に、2



美濃地氏

つ目の民主主義がおもしろい仕組みだと思えます。こうした仕組みは、たとえば政界とか、学会とか、あるいは霞が関で、それなりに受け入れられて評価されているものなのか、それとも、まだそうではないのか、ということを知りたいと思います。

**【太下】** 瀧澤先生にお答えいただく前に、私がお聞きしたかったことが関連しますので、重ねて質問させていただきます。鈴木健さんが『なめらかな社会とその敵』という著書の中で提案されている社会システムですが、われわれは社会科学のシンクタンクなのでこの部分に関心ある研究員が多いと思うのです。私が知っている限りでは、「伝播投資貨幣」や「伝播委任投票システム」の仕組みを鈴木健さんが最初に提唱されたのが、2009年に東京大学で開催された「第1回ウェブ学会」の場だったと思います。ちなみに、この「ウェブ学会」はなぜか第2回が開催されていないようなのですが。それはさておき、この「第1回ウェブ学会」の壇上に出られた方はそうそうたる方々で、鈴木健さんをはじめとして、巖流塾で昨年お呼びした東浩紀さん、今年お呼びする濱野智史さん、等の方々が登壇されていました。

ただし、これは非常に面白いアイデアがあると同時に、批判もたくさん出ています。瀧澤先生もご存じだと思うのですが、その批判に対して、瀧澤先生がどうお考えなのかをお聞かせいただきたいと思えます。

私なりに理解すると、このPICSYというものを使うと結局社会が全部つながっていき、その中でウェイトづけが相互にされることとなります。そうすると自分の世界の中でのポイントと位置づけが明確になるわけです。それは時々変動するでしょうけれども、自分の位置づけ、すなわち社会の中での順位が可視化されてしまうのです。でも、それはすごく生きづらい社会だと思うのです。それで本当にいい社会なのでしょうかという点がひとつ目の質問です。

そして、このつながりは一種の投資の仕組みですよ



太下氏

ね。お互いが分散投資して、その値が常に変動するということなので、常に自分の値が変動することになります。でも、その変動の理由が自分には分からないと思うのです。たとえば、伝播していった先の方がものすごく社会に貢献したら、自分のポイントが上がるかもしれないし、逆にすごく悪いことをしたら下がってしまうかもしれないですね。そう考えると、自分の交友関係自体が、常に社会にさらされていることになります。それも何だか生きづらいような気がするのです。

同様に、伝播委任投票システムや分人民民主主義というものも、一見すごく合理的なような気がするのですが、一方で、今われわれが採用している間接性民主主義が最終的に何か意思決定することにかえて阻害する側面もあると思います。先ほど瀧澤先生がひとつの例を出されましたように、たとえば「自民党に0.6、民主党に0.4」と投票できることになりましたね。でもそれは、国会の場での議論を相殺して、結果として民主的な決定を遅らせることになってしまうのではないのでしょうか。もちろん遅らせること自体に意味があるのであれば、それはいいのですけれども、伝播委任投票システムや分人民民主主義というものは、結果として、現在の民主主義を阻害するようなものになっていくのではないかという批判があると思います。

実際の現役の政治家も、伝播委任投票システムや分人民民主主義について、ツイッターで批判をしてしまし

た。他人に委任した場合、その人がなんらかパーミングパワーみたいなものをもった時、そしてそれがさらに既得権益に結びついた時、ものすごく嫌な社会になるのではないかと考えていた政治家がいました。ちなみに、それを言っていたのは細野豪志という議員で当シンクタンク出身の議員なのですが。

実は、伝播委任投票システムや分人民民主主義は、従来型の共同体のものごとの決め方そのものではないかと思うのです。つまり、最先端のICTを活用して、先祖返りを僕らはするのではないかと、という感じもいたします。このあたりの批判も含めて、鈴木健さんのアイデアに対して瀧澤先生は現時点でどうお考えなのか、ぜひお聞かせいただきたいと思います。

**【瀧澤講師】** まず、「伝播」ということの意味なのですが、これは英語でいうと「プロパゲーション(propagation)」です。コンピュータサイエンスの分野だと、プロパゲーションはしょっちゅう使う言葉ではないかと思えます。

この「伝播」を説明するのに、一番単純な例で言うと、ある貧しい野球選手がいて、その貧乏な選手にあるラーメン屋さんがラーメンを売りました、という話です。その後、その野球選手が活躍してイチローみたいな存在になったとします。でも、イチローみたいな存在になったとしても、ラーメン屋さんにとっては、その野球選手が若くて貧しい時に、ラーメンを食べさせてあげたという過去は、現在の自分の価値に反映していくわけです。イメージとしては、こういう話ですね。

ちょっと誤解を受けやすい点なのですが、僕が覚えている限りで言うと、この「伝播」という概念は、人と人との取引関係を行列で足していくことになるので、フローではなく、ストックみたいにして足していくことになります。過去の履歴が残っていくシステムなのです。ですから、10年前にラーメンを食べさせてあげた人が大出世したということも現在の評価に影響してくるということが起こり得ます。フローではなく、ストックだという点は誤解してはいけないところかと

思います。

ところで、PICSYは「はてな社」というウェブ企業で社内の人事評価に使われたことが知られています。社員同士がマトリックスで、お互いに誰が一番貢献しているか、ということ投票するというような形です。その結果、どうだったかという、今おっしゃっていただいたように、傷つき自信をなくしてしまう人も出たそうです。これは鈴木健さんから聞いた話です。

しかも、パラドックスカルでおもしろいのですが、社員に対して「こういう計算式でやります」と言うと、「これはすばらしい」「透明だ」と言って、みんな納得するそうです。要するに、事前に判定するロジックは透明で素晴らしいという評価になるわけです。だけど、人事制度というものは、あまり納得し過ぎるのも残酷なことになるわけです。ちなみに、「はてな社」の人事評価の考え方が変化したため、今はこういう人事評価はやっていないそうです。

それから、民主主義についてですけども、おそらく鈴木さんが考えていることは、政策 이슈ごとに投票していく、ということではないかと思います。先ほどの例ですと、「ある党に0.6」というふうに話しましたが、現在のICTであれば、それぞれの政策 이슈ごとに直接投票していくといことで十分対応できると思います。しかも、それぞれの 이슈ごとに、たとえば、「日本の経済政策という 이슈であれば、僕はよく分からないから0.7票は中谷先生に入れる」というような、ことを想定しているのだと思います。

ただし、政党制のいいところはいろいろな政策にコンシステンシー（整合性）を一応担保するということがなわけです。ですので、僕が鈴木さんのアイデアを聞いて思ったことは、人々が直接 이슈に対してそんなふうに投票した結果、コンシステンシーが全然とれなかったらどうするのか、という点が僕自身が一番疑問に思ったところです。

実は、鈴木健さんの『なめらかな社会とその敵』については、大々的な本の論評会をやりました。それはウエ

ブで見ることができます。その場では、たとえば社会心理学者の山岸俊男さんとか、そうそうたる人たちが出てきていて、かなり鋭い批判をつきつけています。興味ある人はぜひ見てほしいと思います。たとえば、山岸先生はどういうふうにおっしゃったかという、分人という自分を分けて、生きやすいようにするというけど、それではめちゃめちゃになるから、個人というフィクションがあるんでしょう、というロジックです。

先ほどはちゃんとお話できなかったのですが、たとえば個人とか人格というものはフィクションだとわれわれは分かっているのです。自由意志もフィクションだと事実の上では分かっているのです。でも、事実の上で分かっているということと、「それはなくてもいいのだ」ということとは別のことなのです。そのフィクションを大事にしなければいけない可能性もあって、そのところについてちゃんと議論して、考えられた仕組みではないということが問題なのではないか、と思うのです。

山岸先生がそのときに挙げられていたのは、アメリカの経済学者アブナー・グライフの『比較歴史制度分析』という本のことでした。この本でグライフは、地中海貿易が何で拡張したのか、ということを対象として、ゲーム理論を活用して研究しているのですが、この本の中で「集団責任制」という言葉が出てくるのです。ある都市とある都市の間で貿易が盛んになるということ担保するために、Aという都市の誰かひとりがBという都市で悪いことをしたら、Bという都市はAの都市の商人全部と手を切る、という仕組みです。それは非常に分かりやすい仕組みで、それで地中海貿易は結構うまくいっていたということです。

「分人」とは、それと似たような話だというふうに山岸さんは言っているわけです。つまり、「分人」にして、僕のある部分と、ほかの人のあの部分が勝手に取引していくみたいなかたちになると、逆に言えば、それらを束ねるものがなくなるということで、かえって社会



中谷理事長

を混乱させていくかもしれないということです。だから、そういうところにある種のフィクションを入れていくことに、合理的な理由があると考えないといけないかもしれないわけです。「分人」というコンセプトには、その議論が抜け落ちているのではないかと思います。

**【美濃地】** どうもありがとうございました。

**【太下】** それでは中谷理事長、最後をお願いします。

**【中谷理事長】** どうもありがとうございました。

きょうは鈴木健さんの話が結構出たのですが、鈴木健さんの提案というものは、かなり設計主義的だと思うのです。なぜなら、伝播委任投票システムや分人民主主義という提案がありましたが、その結果、何が起こるのかについては、実は事前にはなかなか分からないわけです。というのは、人間は「不合理」な存在だから、その結果、何が起こるのかということについては本当に分からないと思うのです。

ですので、分人主義のような設計主義的な提案自体、根本的な誤謬があるのではないかという感じがします。そういう批判は彼に対してないのでしょうか。

**【瀧澤講師】** 実は僕は鈴木さんに面と向かって、「設計主義だ」と言いました。でも、彼はその本の序文にも書いてあるのですが、ホブズが書いた構想というものが何百年もかかって事実上構築されていったことと同じように、別に今この提案を実現しようなんて思っていないし、今は社会の骨格みたいなものを提示したの

だ、と彼は言っているのです。鈴木さんもすごいことを言うなと思うのですが、そういう意味で言うと、今すぐそれを実現しようというわけではないのだというのが彼の言い分でした。

**【中谷理事長】** 300年後の読者のためにですね。

**【太下】** はい。では、よろしいでしょうか。

それでは、瀧澤先生、講義自体の内容もだいぶ濃かったですけれど、質疑の応答も大変すばらしい充実したお答えをいただきました。どうもありがとうございました。(拍手)

それでは、これで瀧澤先生の講義を終了したいと思います。